

2013年10月29日(火)

西宮市総合福祉センターへお越しいただいたみなさんへ

「誰もが暮らせる地域づくりフォーラム」スピンオフ企画

李 国本 修慈

「白い革命」と「もうひとつの福祉」――逃げようぜ、一緒に！

清水明彦さんと五十嵐正人さんにぶつけて(聞いて)みましょう^-^://

前略

本日は西宮市総合福祉センターへようこそお越しくございました^-^。せんだって(9月15日)行われました伊丹市でのフォーラム、我ながら(^-^;;企画人でして)とっても面白いフォーラムだったと自画自賛です(^-^;;ずびばぜん)。午前中の大山良子さんと伊藤佳世子さん、お昼からの青野浩美さんに森山裕子さん、とってもステキなみなさんでした。そして五十嵐正人さんと清水明彦さん、私的には東西の「けったい様」でして、そのお二人に揃って参加いただけたことも嬉しい思い出となりました^-^;;。…と、感慨(?)に耽ってる最中の9月17日の昼下がりに五十嵐さんからメールをいただいた内容が次のとおりです。

『一晩寝て思ったのですが(裕子さんも昨晩は寝ました)、清水さんと僕の話は、このままにしておいてはいけないのではないかと。』

そんな五十嵐さんの思いつき(;-^-;)によって、今回の企画が産まれました。

企画内容も全て五十嵐さんからのご要望どおり(五十嵐さんからのメール内容→)『国本さんがホスト(司会兼、話しを回す人で、事態を収集する人で…)になって、清水さんと五十嵐の3人で2時間くらい。ただそれだけだけれど、それしかないシンプルな企画』ということで、私がお二人を収集する(@:!!??)役目を担うこととなりました。はっきり言ってプレッシャー満タン、けっこー困った(^-^;)9月17日以降でしたが、この日をなんとか迎えられることとなりまして甘味料、いえ、感無量です^-^。ということで、私的には第2ラウンドのお楽しみを目指して事態を収集…できそうも無いので、開き直っていきたく思います。以下に、9.15にお二方がお話になった言葉から私が感じたところを記してみました。とりあえずは、そんなこんなをキーワードにみなさんと楽しい夜を過ごせればと思います。宜しく願いいたします。

草々

清水明彦さんと五十嵐正人さんの言葉の数々…

- ☆ なんと共通している??「楽観的」な感じ…。私には欠乏、あるいは欠落している…かも^-^;。
- ☆ 「逃れる」ことは楽観か???,それはどっち向き?、「前」?「横」?「斜め」??。
- ☆ 五十嵐さんは壇上でほんとに緊張しているのかしら?…@素朴な私の疑問^-^;。
- ☆ 清水さんは言いました「五十嵐さんの話の世界に入っていく」際に、「但し、パンツ

はかんと(はかずに)…」の意味は??。私なりにの解釈と、みなさんの解釈とか^-^;。

- ☆ 「訳解らないことが大切」(五十嵐さん)
- ☆ 「絶対に簡潔になんて話さない」(五十嵐さん)
- ☆ 「革命は起こるんや」(清水さん)
- ☆ 「ぎゃーとか、が、大事」(五十嵐さん)
- ☆ 「理解なんてなくていい」「自分が好きな人と一緒に居たいと思う際」(五十嵐さん)
- ☆ 「同じような行動原則で居れること」(清水さん)
- ☆ 「原風景・光ながらの・涎・母が素手で掬う光景」「それを見て凄い・綺麗と思った」(清水さん)
- ☆ 「愛され愛しながら生きた20年」(清水さん)
- ☆ 「人間関係に理解なんていらぬ」(五十嵐さん)
- ☆ 「この人たちの傍を離れられない」「革命より革命的」(清水さん)
- ☆ ジル・トゥルーズの言葉「新しい自由が最も冷酷な監禁にも比肩」「恐れたり、期待を
持ったりしてはならず、闘争の為の新しい武器を捜し求めなければ」
- ☆ 「このことがおこっている、そこと戦っていきたい」(五十嵐さん)
- ☆ 「新しい武器」=「もうひとつ」(五十嵐さん)
- ☆ 「傍に居たい=失いたくない」「ぼやぼやしたら施設に連れて行かれる」「それは危ない」
(清水さん)
- ☆ 「えみちゃんのお母さん、<入院したら、生きてても死んでしまう>」(五十嵐さん)
- ☆ 「被災パラダイス」(清水さん)
- ☆ 「思いがけないこと、訳の解らないこと、それが生きているということ」(五十嵐さん)
- ☆ 「とにかく生きんがために生きる」「その実感」(清水さん)
- ☆ 「ベットを空けてくれて、いらっしやいと言われても、とんでもない、持っていかれて
たまるかえっ」(清水さん)
- ☆ 「自己価値を發揮していくこと」「失うわけにはいかないこと」(清水さん)
- ☆ 「合理的には整理できない」(清水さん)
- ☆ 「死んでしまわなくても、その人の価値は死んでしまう」(清水さん)
- ☆ 「とんでもないことをする人はかわいい」(五十嵐さん)
- ☆ 「彼女の意思を代弁するんやない」「彼女の意思は在る」「確信している」「問うて来た
し、選び取った生活(谷野さんのこと)」(清水さん)
- ☆ 「福祉の仕事をしてしまったがために失ったことがたくさんある」(五十嵐さん)
- ☆ 「相談支援もサービスか!?!、違うやろ」(清水さん)
- ☆ ガタリ言葉「アルテルナティブ=別の場に立つ」「その外に出ること」「裕子さんは出
してくれた」(五十嵐さん)
- ☆ 「二流市民からの解放、更に支援者も解放される筈だった(基礎構造改革が始まる頃)」
「しかし本質を見失った」「互いに存在の価値をおとしめられた」「そのことをやり返し

- ていく」「仕返し的に」(清水さん)
- ☆ 「だから、もうひとつ」「常に何かもうひとつを持とうよ」(五十嵐さん)
 - ☆ 「福祉を作っちゃったから、福祉を作った事が悪くない、そこで止まったことがダメ」(五十嵐さん)
 - ☆ 「埋め殺しへの抵抗」(清水さん)
 - ☆ 「みんな自由になった筈なのに、本当の選択なのか」(五十嵐さん)
 - ☆ 「これだけでは済まず、揺する、揺らぐ…ということ」(清水さん)
 - ☆ 「ほんまに悩んだんか!?!ということ(相談支援に対して)」(清水さん)
 - ☆ 「管理のシステムから逃げ出しましょう」(五十嵐さん)
 - ☆ 「親に愛された娘としての役割」(清水さん)
 - ☆ 「自由と管理、情報と管理」(五十嵐さん)
 - ☆ 「みんな 60 越してそっちが主流」「だんだん障害になっていく層」「その世界に入った時に、青葉園の 65 歳超えた人たちが生き活きと生きていると…」「みんな同じに向かっていく」「青葉園の方々は超先輩」
 - ☆ 「檻の中の鉄格子、見えるものは解りやすい」(五十嵐さん)
 - ☆ 「出た際(地域といわれるところへ)の鎖に気がつかない」(五十嵐さん)
 - ☆ 「高齢者連帯・価値観連帯」(清水さん)
 - ☆ 「究極のもうひとつ」(五十嵐さん)
 - ☆ 「それでもそれを食い止めながら合意の世界で作られた建物の上に次の地平を作る、ひとりひとりの存在の価値を認め合う地平を作る」(清水さん)
 - ☆ 「天空の…」(清水さん)
 - ☆ 「奴隷として働かされている」「人間性を取り戻すということ」(五十嵐さん)
 - ☆ 「保護的に始末される装置から逃げる、共に逃げる」(清水さん)
 - ☆ 「僕らが制度内の仕事だけで福祉をやった気になっていたら、大切な人達の未来を厚生労働省の会議室に委ねることになっちゃうんだぜ」(五十嵐さん)
 - ☆ 「保護的とはサービス=始末する装置」「白旗掲げて逃げる」「みんな逃げたら追いかけてきた奴らは包囲される」(清水さん)

清水明彦さんと五十嵐正人さんに聞きたいことっ!

お二人の共通点と相違点を考えながら・・・

By くにもと

- ☆ やはり楽観的ですか?。
- ☆ 「逃げる」「逃走」は「闘争」ですか? 「逃れる」とは「闘う」こと?ですか。

- ☆ 清水さんは「パンツを脱いで(はかんと)…」、五十嵐さんは常にパンツをはいてない?。
- ☆ 清水さんは、実は普段はパンツをはいている^-^?…局長という。
- ☆ 五十嵐さんもはいているにははいている?。
- ☆ パンツは鎖か?、自らの鎖か?。
- ☆ 脱げないパンツ?…、気付かない鎖に繋がまわられている?。パンツは何時でも脱げなくては…。
- ☆ 違ってそうで、そうでもない「計画」…西宮での計画と、「計画なんて!」という五十嵐さん。言葉の意味が交錯する。だから簡潔ではないのと、言葉も解釈によって幾らでも変わる?。
- ☆ 清水さんの言う「計画」とは、実は(一般的にいう)それとは対極…。そもそも一般的ってなんやねん?と自らに突っ込む。
- ☆ 桑山さんの言う「経済合理性だけでは動かない生物」…。これが五十嵐さんの言う、取り戻そうという「人間性」?。そういった生き物は減っている?。増えていく?。
- ☆ ブータンの国王がきたときの話し…桑山さん。
- ☆ 一方での新自由主義の考え…、と、動機付けがないと、を否定できるのか?。インセンティブなんて言葉はどうなんですか?。
- ☆ この人の作った物語に確信がある…暮らした時間がそれを言わせる…桑山さん。
- ☆ 仕組みとはぶち壊されるもの…はあたりまえと桑山さん。
- ☆ 五十嵐さんは解り難い言葉使いだけど言葉一つ一つは分りやすいと感じるが…。
- ☆ 清水さんは解り難いようですが、言葉を丁寧に使っている?ようにも感じる。
- ☆ しかし、言葉の持つ力というか、その本質は難しく、…言葉を持つての説明の限界?。
- ☆ だから清水さんの話しは解り難い^-^;。
- ☆ 逃げ方を考える際に…?。
- ☆ 五十嵐さんの言う「絶対に簡潔になんて話さない」。
- ☆ 清水さんも全然簡潔ではない^-^;。だけど、双方に「とどのつまり」がある(ように思える)。
- ☆ 五十嵐さんはホントに緊張してるの?(繰り返し、純粹に)。
- ☆ みなさんは「パンツはかんと…」の意味が解ったか?。
- ☆ 革命は起こるといふ清水さんの絶対と五十嵐さんの言う「絶対に簡潔になんて…」の「絶対」。五十嵐さんは続けている(続いている)コトを言い、清水さんは未来のこと(今はそうでないこと)を「絶対」と言っている。
- ☆ ふたりの絶対という楽観?、こだわり?、希望?。
- ☆ 楽観だが逃げる、逃亡?…亡くなりたくない、亡くなろうが、生きんがために…。
- ☆ 何で私たちは「ぎゃー」をそのまま受けられない?。
- ☆ 何で革命の担い手が変わっていくのか?。
- ☆ 五十嵐さんのいう「理解なんてする必要は無い」と清水さんの言う「理解しあう」(青

葉園の活動理念)。

- ☆ 五十嵐さんの「相手に解ってもらおうなんて思わなくていい」と清水さんの共振。
- ☆ 五十嵐さんの「好きな人と一緒に居たい」と清水さんの「この人らの傍らから離れられない」。
- ☆ 清水さんへ、↑のことが「革命より革命的」の意味を。
- ☆ 新しい自由が最も冷酷な監禁にも比肩 ジル・トゥルーズの言葉。
- ☆ 恐れたり、期待をもったりしてはならず、闘争のための新しい武器を捜し求める。
- ☆ ↑のことが、人を始末する装置を食い止めながら×3回(清水さんは繰り返している)。
- ☆ えみちゃん母の「入院したら死んでしまう」、谷野さん母の「青葉園でしか生きられない」。
- ☆ 五十嵐さんの言う「訳の解らないこと、それが生きているということ」。と、清水さんの言う「とにかく生きんがために生きる」。
- ☆ お二人ともに無い(あるいは無かった)「入所施設」だとかの概念。
- ☆ 合理的に整理できないことを整理しない・・・しかし、してしまう装置。
- ☆ 死んでしまわなくても死んでしまう・・・共通。
- ☆ とんでもないことをする人がかわいい。なんとなく「ラー」な感じ^-^;
- ☆ 五十嵐さんの言う「支援者も奴隷」と清水さんの言う「支援者も解放される筈が」。
- ☆ 五十嵐さん「福祉を作ったことがダメでなく、そこで止まって(停まって)しまったことがダメ」。
- ☆ ↑、と、清水さんの言う「それを食い止めながら×3」。
- ☆ 清水さんの言う「埋め殺しへの抵抗」と五十嵐さんの言う「もとひとつ」という武器。
- ☆ 五十嵐さん「みんな自由になった筈なのに」、と清水さんの「互いの存在を貶められた」。
- ☆ 五十嵐さんに「補完性の原理」を。
- ☆ 「究極のもうひとつ」、それが「天空の…」なのかと…。
- ☆

もうひとつの福祉

135号

2013年7月

〒277-0885 千葉県柏市西原7-7-7

FAX 04-7169-7710

メール baobab-i@jcom.home.ne.jp

ばおぼぶ

9月14～16日

9月14～16日、「ばおぼぶ」のご利用ができなくなります。

一家揃って、兵庫県の方に行っています。

ちょっと詳しく説明させていただくと、こういうことです。

通常、「ばおぼぶ」や「小島屋」について講演を頼まれる場合、講師として指名されるのは五十嵐になります。そこで五十嵐は、特に「小島屋」についてのテーマの場合には、より分かってもらうために

可能な時には森山裕子さんを連れて行きます。五十嵐自身は裕子さんのトイレの手伝いなどできないので、日帰りなら先方の誰かに手伝ってもらえる場合や、宿泊の場合には女性スタッフが同行できる場合に、限られるのですが。

で、今回、9月15日に頼まれた講演は、というと……。

指名された講師は、森山裕子さんと五十嵐なのです。むしろ、裕子さんがメインです。

つまり、最初から森山裕子さんがいくことが前提。しかし会場が兵庫県ということもあって、日帰りは現実的ではなく、前後どちらかは泊まりになります。さて、どうしようか、ということになりまして、諸事情を考えると小島がついて行って、裕子さんのトイレ等々を手伝うしかない……。

でも、待てよ。そうしたら村上弓子さんはどうしようか。日頃、小島を取り合ってコントのような日々を送っている裕子さんと弓子さんです。もちろん置いていくことは考えられません。それじゃあ、一家揃って四人で行こうか、ということになったわけです。

フォーラムの中の一コマということなので、裕子さんと僕が話をするのは一時間程度と思われれます。依頼されているテーマは「ばおぼぶ」や「小島屋」というより、それらを含みながら、この「四人の我が家」の話のようです。ですから、一家揃っていくというのは、正しい選択のような気がします。

しかし、話はこれで終わらず……。

「弓子さんは、裕子さんと五十嵐のまじめっぽい話を聞いていても面白くないよね」ということになりまして、講演の間は小島と観光してこようか、と……。まあ、それはそうかな、と思うのですが、この時点で上記の『依頼されているテーマは……。この「四人の我が家」の話のようです。ですから、一家揃っていくというのは、正しい選択のような気がします』っていうのは、どこにいったのだろうと言う感じなのですが……。

裕子さんと五十嵐が講演している間、弓子さんと小島は観光ということで作戦が進行していたのですが、二人の観光先を考えていると、一時間じゃあ足りないなということに気がつきました。「〇〇を観に行くなら、何時間もかかるから」、というわけで「それならフォーラムの間ずっと観光することにしようか」となり。「△△まで足を伸ばすと一日がかり」、というわけで「じゃあ前泊して二人は朝から観光してようか」となりました。そしてさらに「裕子さんも、どこか連れて行ってあげたいし」、というわけで「じゃあ講演の日も泊まることにして翌日四人で観光して帰ろうか」と……。

そんなこんなで、一家揃って9月14～16日が、不在ということになりました。

と、いうことでご利用を希望するかもしれないみなさん、大変に申し訳ありません。9月14～16日はお受けする事ができません。ご利用の日程を前後に調整していただくか、その間は他の事業所等をご利用くださるよう、お願いいたします。

今回、森山裕子さんと五十嵐が参加するフォーラムの詳細は、下記のホームページで。

『地域生活を考えよーかい』のホームページの「お知らせ」のカテゴリー

http://www.kangaeyo-kai.net/info/inf0130702_1.html

興味のある方はどうぞ、ご覧ください。



「ばおぼぶ」と「小島屋」の基礎知識

この機会なので、「ばおぼぶ」と「小島屋」のことなど、ちょっと書いておこうかと思えます。僕は平成元年から仕事として取り組んでいるのですが、当時の社会福祉はまだ措置時代で、障害福祉に関する制度の中に生活に関わるメニューは皆無に近い感じでした。そのころからずっとご利用くださっている方たちは、文字通り「ばおぼぶ」と共に歩いて、その方たちがご利用して下さる一回一回の積み重ねで、「ばおぼぶ」の形ができてきたと言っても過言ではありません。ですから、その方たちには「ばおぼぶ」の独自のスタイルについての違和感は少ないと思います。現在日本中でほぼ100パーセントに近いシェアを誇る障害者自立支援法（障害者総合支援法）における生活支援と、圧倒的に小さなシェアの「ばおぼぶ」を、しっかりと使い分けてくださっているようです。

しかし時代は進み今では、ご利用くださるみなさんの中に、自立支援法の生活支援を先に使っていたという新しい方々も大勢いらっしゃいます。その大半の方は、「ばおぼぶ」が自立支援法よりも前から活動していて、そのスタイルがずっとそのまま続いていて、つまり自立支援法という制度の仕組みや目的や使い方などと異なっていることを理解してくれているようです。そして、それらの理解の上で、制度としての生活支援と、制度外の「ばおぼぶ」をちゃんと使い分けてくださっています。

でもその一方で、自立支援法を先に使いはじめた方の中には、それが生活に関わる福祉のすべてだと思込込んでいて、制度外の「ばおぼぶ」も同様の感覚でご利用になり、どうもしっくり来ていない方もいらっしゃる様子です。だからといって、特になにか大きな問題があるわけではないのですが、やはり「ばおぼぶ」のことをもう少しご理解いただいた方がより豊かな暮らしにつながる使い方ができるような気がします。

このことについては、なによりも僕らが面倒くさがって、「ばおぼぶ」って何なのかをみなさんにお伝えする作業をさぼっていることが原因です。

思い起こせば、平成元年の事業化から数年の間は、毎年度終了の頃に「ばおぼぶ一年の報告」みたいなものを作ってお送りしたりしていました。また、その頃は呼ばれて「ばおぼぶ」について話をする講演だけではなく、「ばおぼぶ」で主催して活動の報告をするような機会も作っていました。あまりの忙しさに、そうしたことがだんだんできなくなってしまったのですが、やはり、何らかの発信は常に必要です。

と、いうことで「ばおぼぶ」「小島屋」の基礎知識、簡単にですがまとめておきます。どうぞ、ご利用のさいの参考になさってください。

五十嵐正人&小島覚子

10年前から夫婦です。二人で「ばおぼぶ」をはじめ、今でも二人で家業のように「ばおぼぶ」をやっています。五十嵐は大学でフランス文学、小島は江戸川学園豊四季専門学校で理学を専攻していました。その頃から、それぞれボランティアで障害を持つ人たちと遊びに行ったり、今の「ばおぼぶ」の活動に繋がっていくお泊まりなどをしていました。現在の利用者さんの中には、仕事としての「ばおぼぶ」創業（平成元年）以前から、30年近いお付き合いの方もいらっしゃいます。そんなわけで小島は仕事上では旧姓の小島のままにしています。

ちなみに、小島はみなさんと電話でご利用をうけたまわる会話をすることが多く、五十嵐はそこで決まった時間にご自宅にお迎えに行く事が多くあります。そのさいに玄関を開けてくださった親御さんが、家の中のお子さんに向かって「小島さんが迎えにきたわよ〜」と声をかけることがあります。正解は「五十嵐さんが迎えにきたわよ〜」です。戸籍上も、いちおうそうなっておりますので……。

ちなみにちなみに、車で送迎をすることがありますが、これは仕事ではなく、五十嵐と小島の「困ってんなら、おじさんが乗っけてってやるよ」というスタンスです。福祉における有償の送迎サービスが制度化されたことはよいのですが、関係者を中心として、良いことがなされた時にも必ず生じてくる間違いの部分について考えなさ過ぎのように思います。有償の送迎が進んでいく一方で、それによって失われつつある「おじさんが乗っけてってやるよ」を同時に並行して取り戻していくこと。僕ら二人のやっていることは、そんなことのような気がします。

ばおぼぶ

五十嵐と小島がそれぞれに行っていたボランティアとしての取り組みでしたが、小島がまず平成元年の5月に「小島お泊まりの家」として事業化しました。これを「ばおぼぶ」の事業としての始まりとしています。その翌年に五十嵐も事業化し、最初は別々のものだったのですが、後に一つになり、その時に名称を「ばおぼぶ」とあらためて、今にいたっています。

やっていることは、お預かりしたり、付き添ったり、みたいなことです。車を使っての送迎は「ばおぼぶ」の仕事としては行っていません。

制度外

特に最近多いのですが、障害を持つ人たちのことは「行政が面倒をみる」と思い込んでいる人が大勢います。これは明らかな間違いです。「ベーシックインカムとして、まず行政が対応すべき」とか「セーフティネットとして、みんなでできない部分については行政が責任を持つべき」というのなら、まだよいのですが……。たぶん間違いのないことだと思うのですが、障害を持っている人が困っていたなら、この世で暮らしているすべての人はその思いを大切にしながら、誰もが関わっていいはずなのです。そのことを多くの人に意識してほしいと、僕らは「ばおぼぶ」を紹介する時に「制度外」という言葉を使います。あくまでもこれは国の自立支援法などには規制されないという意味です。講演などでご紹介いただく時に「法外施設ばおぼぶの五十嵐さんです」などと言われることがあります。僕は「施設」でもなければ「法外」でもありません。ブラックジャックみたいに警察に追われているようなイメージを持つ方もいらっしゃいますが、そんなことはないのです。自立支援法外ではあっても、日本国憲法にはしたがっているのだから「法外」ではないのです。時と場合によっては「制度内」福祉サービスよりも、ずっと日本国憲法を遵守した活動をしていることもあります。

かかりつけ

たとえば癌などの大病になった時には大学病院みたいな総合病院に行けばいい。でもちょっと風邪をひいたり、お腹を壊したような時には、混んでいて待たされる総合病院よりも、かかりつけの小さな町医者に行った方がいい。その町医者は僕のことを子どもの頃からずっと知っていて、ちょっとした病気ならサッと対応してくれる……。こんな、かかりつけみたいな福祉をめざして「ばおぼぶ」ははじまりました。

ですから、抱えている問題によって適した福祉のスタイルを使い分けてもらえることが理想なのですが、これはなかなか実現されません。本当なら総合病院のような福祉の場が適していたり、救急病院のような福祉の制度が適しているような場合でも、定員が一杯等の理由で、町医者っぽい「ばおぼぶ」をご利用になる方が絶えません。このこと責任は利用者さんにあるのではなく、ほぼ100パーセント、制度を作る側にあることです。そんなこんなで、待合室がガラガラの町医者みたいには、なかなか出来ません。

もっとも、「ばおぼぶ」向きではない事情を抱えた方であったとしてもご利用くださり、〇〇くんや△△さんと一緒に過ごせる時間を持つことは嬉しいことです。

「ばおぼぶ」の仕事は今のところ、かかりつけに成りきってはいませんが、四半世紀もやっているのと、むかし就学前の頃にはじめてご利用くださった方が、大人になっても来てくれたりします。この点では、少しばかりかかりつけっぽくできているかな、と思います。

民宿タイプ

たとえば宿泊業を営もうと思った時、大きく二つの選択肢があるように思います。ホテルタイプと、民宿（ペンション、山小屋）タイプです。ホテルは多くの人に一定以上のサービスを提供します。一方、民宿タイプはそんなに多くの人を泊めることはできませんし、季節やその時々の宿泊人数などでサービスの内容にばらつきが出ます。旬の食材が豊富で景色がいい時季ならラッキーですが、そうでなければ残念な時もあることでしょう。サービスは一定量ではなく、その時々、できるだけが限界になります。

こう考えるとホテルタイプの方が良い感じがしますが、民宿タイプにもよさがあります。た

たとえば、ホテルのような巨大な施設は、山の奥など観光地の中心に近づくことに困難があります。どうしても、その周辺に作られることになります。しかし民宿タイプは海の真ん前でも山の頂上付近でも、その小ささを活かして自在です。このことを、障害を持つ人への生活に関わる福祉に当てはめてみてください。自立支援法の生活支援はホテルタイプ。「ばおぼぶ」は民宿タイプ。そして目指す山奥を、福祉が必要とされている街の中の現場。僕らは、その真っ只中にいたいと思っています。そこに暮らす者たちとして。

ホテルでの働き方はサラリーマンであり、基本として決められた勤務時間だけそこで働くことになります。勤務時間が終われば、それぞれが自分の家に帰っていきます。

民宿の主は、多くの場合、そこが自分の家です。その気になれば一日中でも、自分の思うまま、自分が誇りを持つ大切な仕事に没頭することができます。

どちらが良い悪いではなく、大きく分けると、この二つの働き方があるということです。このどちらもが必要であり、ニーズに応じて使い分けられるべきなのです。そして「ばおぼぶ」は民宿タイプだということです。

家と家庭

僕らがまだ学生で、ボランティアとして預かりなどをしていた頃、「〇〇の家」という名前をつける施設や作業所がたくさんありました。「家」であることを願っていたり、それをめざしていたり、という気持ちはわからないではありません。しかしそうした所の職員が「うちは家みたいなものです。〇〇の家ですから」みたいに言うのには、違和感を感じました。名前に「家」をつけたからといって、そこが「家」になるわけではありません。なんか、ちょっと嘘っぽいぞ、と……。

そんなわけで、僕らはずっと家にこだわってきました。本当に「家」がいいのなら嘘をつかないで「家」にしよう……。マンションの一角だったり一戸建てだったり、形態は様々ですが僕ら自身が居住者として暮らす「家」での預かりをしてきました。

そして、特に小さなお子さんをお預けになる親御さんからは「家庭的な場所にあずけたい」という声をよく聞きました。「家庭的」ではなく、僕らが結婚してからは間違いなく五十嵐夫婦の「家庭」でのお預かりができています。

民間個人

ここまで書いてきた「かかりつけ」でいることや「民宿タイプ」であることや「家庭」であることにも繋がることです。僕らは法人格を持たないことにこだわっています。制度としての福祉事業とは異なる選択肢であるために。

「ばおぼぶ」にきた人の前にどのように立つのか、ということです。組織のメンバーの一人として立つのか。それとも一人の人間として立つのか。後者でありたいと思うのです。そしてこのことは、僕らがその人の前に立った瞬間に、大きな差を生じるのです。目の前の人を「障害者の一人」にするのか、「〇〇くん、△△さん」にするのか。組織の場合にはその組織の約束事やルールの中で、利用してくる人を障害者として想定しています。たとえ現場において一人ひとりの職員は、〇〇くんとみているつもりだったとしても……。

「ばおぼぶ」には、「障害者」という一まとまりの言葉を使った定款のようなものはありません。毎日毎日、そのつどきてくれた人と過ごすのです。僕らがその人の前にどう立つかによって、その人は障害者にも〇〇くんにも変わっていくのです。障害を持つ人の人間性を取り戻し、高めていく、おそらく最良の方法の一つは、その前に立つ僕ら自身が人間性を回復することなのだろうと思います。

支援者ではなく

僕らが支援者としてその人の前に立つと、その人は支援される人になってしまいます。

僕らが支援者とか、施設職員とか、相談支援員とか、そうした名前のない一人の人間としてその人の前に立つと、その人は一人の人間であることを失わずにいられます。

自由な福祉

そんなこんなを、社会福祉と区別して言うなら、「ばおぼぶ」は「自由な福祉」でありたいと思っています。

このことは、もちろん「社会福祉」を否定することではありません。両方必要なのです。ただ、圧倒的に「自由な福祉」が少ないことが心配です。「社会福祉」を減らすのではなく、それ以上に沢山の「自由な福祉」が街中に溢れること。たとえば「社会福祉」は障害を持つ人の暮らしを「権利」から考えたがります。「自由な福祉」は「自由」から考えることができます。社会福祉の制度が進めば進むほど失われていく「自由」。とっても心配です。

「隙間を埋める」のではない

よく「ばおぼぶ」は制度福祉の隙間を埋める存在、と思っている人がいますが、これは本当は間違いです。現状として、「ばおぼぶ」は圧倒的に少数側なので、現実としてはそうなっています。自立支援法のサービスが使えないから「ばおぼぶ」みたいな……。ですから、措置制度の時代から、公的サービスで断られた人たちが「ばおぼぶ」を頼ってくるのが何度となくありました。嫌な例ですが、総合病院がみれないからと町医者に癌患者を送り込むようなものです。

本来、街のかかりつけでは対応できない場合に、より専門性があり、なおかつより税金が投与されている自立支援法の事業所や公的施設が対応するべきなのです。一番正しい流れは、ご本人が対応できないことを、その一番近くにいる家族が対応し、それが難しければ周りの知人や隣近所。それでも無理なら地域のボランティアや、それでもダメなら「ばおぼぶ」みたいな民間個人のかかりつけ。そこが対応できなかつたら自立支援法の事業所が対応し、それでもダメなら地方自治体、さらには国の政府が絶対に対応する。それがまっとうな流れだと言えます。

しかし現実には坂道を転がるように、本人の困難が国から家族に向かって「わが市ではみれません」「わが事業所ではみれません」と、落ちてくる。加速度をあげながら。そして家族が最後の砦になって支えなければならない……。この異常な状態は、何とかして変えていきたいと思います。だから、僕らは社会福祉の後に控える「制度の隙間を埋める」存在でなくなりたいと思っています。

「ばおぼぶ」をご利用の方の中には、僕らを自立支援法の事業所よりも先の選択肢として使ってくれている方もいらっしゃいます。ありがたいことです。

できるだけ

そんな「ばおぼぶ」ですが、質量ともにできることは限られています。得意な分野もあれば不得意な分野もあります。たとえば苦手なのは、定期的なご利用です。「ばおぼぶ」はその誕生の頃からずっと、緊急時への対応をみなさんから望まれてきました。また現在においても、この点は自立支援法の事業所よりも期待されたりします。この特性をいかすために、毎週〇曜日、みたいな予約は無しにしています。ご利用の方がそれを望んでいたとしても、一回一回、ご利用を決めていく事にしています。いつ飛び込んでくるかわからないご利用への対応を大切にしたいからです。

そしてご利用の方が大勢いたり、何らかの事情で自立支援法の事業所や公的施設がお断りした方を受けて五十嵐がその人にかかりっきりになったり、そんな時にはご利用くださっているみなさんに本当に貧弱な対応しかできなかつたりします。

「ばおぼぶ」はいつでも、できるかぎりしかできません。申し訳ありません。

でもこのことは悲観するばかりでもないのです。我が家で一緒に暮らしている森山裕子さんなどは、およそ20年前に事情があって一緒に暮らしはじめました。その時でもできるだけでした。そして毎日毎日のできるだけの積み重ねで、ずっと一緒に暮らしています。この「できるだけ」は現在も進行中です。

小島屋

千葉県の単独事業の「生活ホーム」です。

森山裕子さんと一緒に暮らしはじめたのが平成4年。その後平成12年に生活ホームになりました。

平成18年には村上弓子さんが加わって、我が家は四人になりました。

もうひとつ

福祉は、あれかこれかの二者択一であってはいらないと思います。近年最大の愚行は、措置から契約への移行です。それをわけのわからない人たちが会議室で決めたという愚かさ……。

現代日本という民主主義国家において、本当の意味での利用者の意思決定が、まったく入る余地がなかったのです。措置と契約を並行させて、その利用によって一つひとつの事業メニューを措置と契約に振り分けていけばよかったです。契約への移行は選択の権利を口先でうたひながら、選択によってメニューが決まっていくというルールを無視して出発したのです。

僕らは、自立支援法の事業を否定しません。それと並行して「ばおぼぶ」みたいなのがあれば、いいと思っています。それがたとえば「もうひとつ」の一つの形です。

あるいは社会福祉も否定しません。並行して自由な福祉があればいい。

そして「ばおぼぶ」を利用しているすべての人に、「ばおぼぶ」以外の「もうひとつ」としての自立支援法の事業所があればいいな、と思っています。すでにそんな暮らしを見つけている人には、さらに「もうひとつ」、その人を大切にしてくれる誰かがいてくれたらいいな、思います。そしてもっと、もっと「もうひとつ」を……。

「もうひとつ」は名詞みたいに固まっているものではありません。動詞のように、常に新しい「もうひとつ」を、求め続ける行為なのです。

感動

卒業式のような行事もなければ、充実感を伴うようなイベントも、「ばおぼぶ」にはありません。毎日毎日、淡々と過ぎていきます。その中で、とっても困難な事態を迎えることもあれば、とっても素敵な場面が表れることもあります。日々の喜びや悩みが繰り返されて一日一日が過ぎていきます。ですから、制度外で四半世紀とか、自宅で障害者をお預かりして……、みたいな言葉から連想されるような、愛と感動の物語的なものはありません。

ご利用くださるみなさん、感動は期待しないでくださいね。

ちょっとしたムフフなこととか、いい感じのことだとか、そんな日常はたくさんあります。それがけっこう、僕らにとっては幸せだったりしています。

参考になるもの

ブログ「裕子ねーんね・弓ちゃんオハヨー」 <http://yuuko-nenne.seesaa.net/>

我が家の暮らしをなんとなく書いているブログです。

小説「三人暮らし」

「ばおぼぶ」のはじまった頃から、森山裕子さんとの暮らしあたりまでを書いてあります。

紙面の都合上、今号では賛助会員更新について割愛させていただきました。賛助会員としてご協力いただいているみなさん。

ありがとうございます。

次号の紙面にて、報告させていただきます。

前号でお知らせした『普通に生きる』柏上映会ですが、おかげさまで大盛況。そして大成功でした。

会場にいらした方たちのアンケート回答など、下記の「普通に生きる」柏上映会ブログにアップしています。どうぞ、ご覧ください。

<http://kashiwa-futsuuni.seesaa.net/>

一定の資本主義経済の発達段階における社会・経済的条件によって規定される社会福祉の典型は、「法律による社会福祉」(statutory social service)である。わが国の現状でいえば福祉六法である。しかし法律による社会福祉が社会福祉の全部ではない。いな全部であってはならない。法律によらない民間の自発的な社会福祉(voluntary social service)による社会福祉活動の存在こそ、社会福祉全体の自己改造の原動力として評価されなければならない。「法律による社会福祉」が法律の枠にしばりつけられて硬直した援助活動に終始しているときに、新しいより合理的な社会福祉理論による対象認識と実践方法を提示し、自由な活動を展開することのできるのは自発的な民間社会福祉の特色である。それは財源の裏づけもなければ、法律によって権威づけられた制度でもない。しかしそのようなことは自発的な社会福祉にとって問題ではない。問題なのは、その社会福祉理論の合理性に裏づけられた新しい社会福祉的援助原則を、たとえ小規模であっても、これを実証してみせることであり、また「法律による社会福祉」の側がこれを謙虚に受けとめて法律を改正し、その時々社会福祉全体をいかに発展させるかということである。

『社会福祉原論』(岡村重夫 全国社会福祉協議会 1983年)より

精神医学改革のために持ち出された技術的手段としては先ず、病院内部の改革・人間化、作業療法、社交療法、責任感の意識化、療法クラブの創設……等々がありました。この結果、いくらかの効果はありましたが、それは精神医学の根本的な抑圧性を変えることはできなかつたし、またそれほど有効なものではありませんでした。次に考えられたのは、病院外活動です。患者クラブ、患者の家庭訪問、患者たちのための保護工房……等といったものです。私としてはそれが全然効果のないものだったと言うつもりはありませんが、しかし不幸なことに、それはときとして抑圧の性質を変えながら、かえって抑圧を強化することになったと言わねばなりません。そのために、この種の活動は精神病院のミニチュア化と言われることにもなったのでした。

(中略)

「アルテルナティブ」というのはつまり別の場に立つ、精神医学の問題の外にでるということです。再び別の精神医学をやるということではなしに、別次元の解決を見出そうとすることです。

『現代思想 1982年1月号 特集＝現代フランスの思想』(青土社)

「シンポジウム 精神医学的状況」より

※ドキュメンタリー映画『すべての些細な事柄』 監督ニコラ・フィリベール 出演ラ・ボルドの人々他 1998年公開 ラ・ボルドはフェリックス・ガタリと精神科医ジャン・ウーリーが1953年に設立した解放病棟のクリニック。

たとえば、監禁環境そのものともいえる病院の危機においては、部門の細分化や、デイケアや在宅介護などが、はじめのうちは新しい自由をもたらしたとはいえ、結局はもっとも冷酷な監禁にも比肩する管理のメカニズムに関与してしまったことを忘れてはならない。恐れたり、期待をもったりしてはならず、闘争のための新しい武器を探しもとめなければならないのである。

『記号と事件 1972-1990年の対話』(ジル・ドゥルーズ 宮林寛 訳 河出文庫)

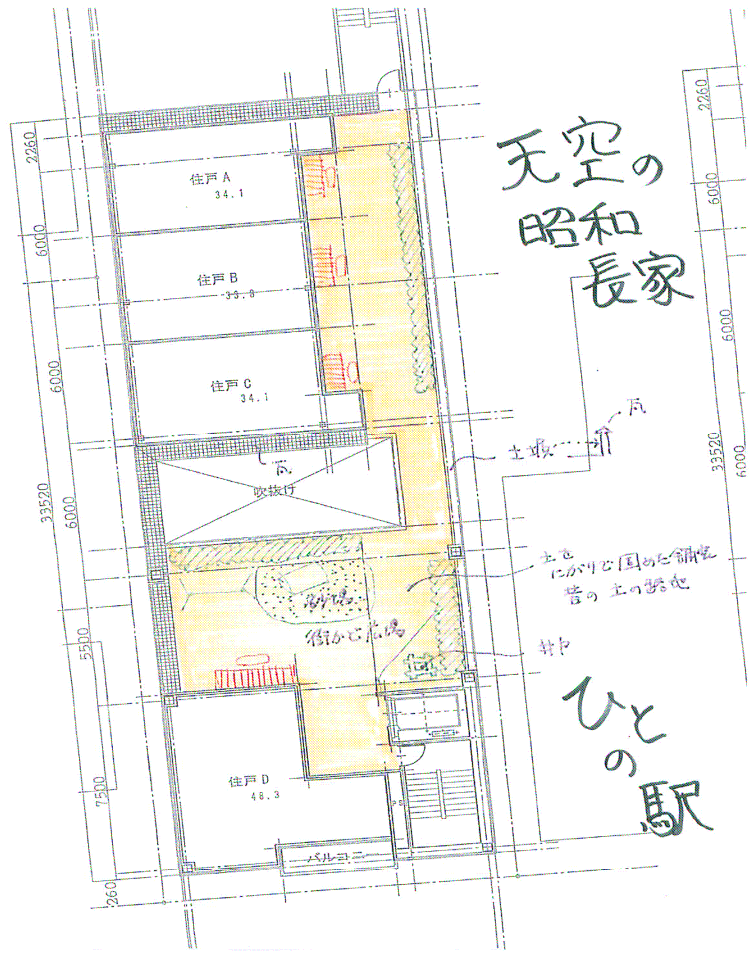
2013. 9. 15.

誰もが暮らせる地域づくりフォーラム2013



白い革命.

清水 明彦



天空の
昭和
長家

ひとの
駅

五十嵐さんへ

清水さんへ

どーも、共通している「楽観的」な感じ・・・
「逃れること」は楽観か???

ちゃんとした話し

??緊張してる五十嵐さん??^-^;;

訳解らないことが大切

ちゃんと説明できるように話すな

簡潔・・・大切なものを削ぎ落とす

簡潔に話してわかるようなことは・・・

人間はこうだよ

絶対に簡潔になんて話さない

制度外

制度としてはやってない
法外ではない^-^;;
法にはのっとっています

ぎゃーとか、いろんな言葉を
とても大事だと思っている

ぎゃぎゃーに対して
いいヘルパーは「ですよ」と
理解してくれる

理解するという言葉で、削ぎ落としている

ぎゃぎゃーをぎゃぎゃーで受け止める

理解なんてしなくていい

相手に解ってもらおうなんて
思わなくていい

自分の好きな人と一緒に居たいと
思うとき・・・

日常生活の中で理解なんかしない

支援する人たちは理解が必要だと
そのことが、人を決める

支援する人は理解することが必要と
決めていっちゃ

五十嵐さんの話の世界に入っていく
但し、パンツはかんと・・・
聞いてもらえれば解ると思う

白い革命・・・
たいしたことやないが・・・

僕らの世代(1954年生まれ)
その時ぐらいのもんしか・・・
中学・高校の時代・・・
純粹に社会を変えねば・・・
早く大学行って火炎瓶投げねば・・・

革命は起こるんやと、世界同時
来週かも、月末かも・・・
革命は起こる
と、全ての矛盾が解消するというノリ
真に受けて・・・
赤い革命を

しかし・・・
革命を起こすというた人がいなくなり
?????
どない生きてたら・・・?

地域闘争・・・
中央闘争ではなく、地域闘争
ろくでもない学生だったが

何を思ったか・・・
出会いに行った・・・
20年もの・・・障害者といわれるご家庭

同じような行動原則で「居れる」こと

出合った時の風景を今でも覚えている

未就学・ひとりぼっちの障害者を
などとやっていたのかも知れないが
40年前の話し

この子を守っていけるのは私しかない
と、母親
夕暮れ 西日 涎
原風景 光ながらの
母が素手ですくう光景
それを見て「すごい」と
「綺麗」と思った・・・

理解された人になっていく
そんなことがなくなつたって一緒に
いたいんだと
人間関係・・・理解なんていら
新しい自由が最も冷酷な監禁にも比肩
このことがおこっている
そこと戦っていきたい
恐れたり、期待をもったりしてはならず、
闘争の為の新しい武器を捜し求めなければ
ジル・ドゥルーズ
新しい武器=「もうひとつ」
14分頃に裕子さんが停まる
緊急一時保護
ルール・・・事前予約
利用理由
社会的理由
保護者の病気・冠婚葬祭
五十嵐さん丁寧な説明^-^;;
平日の昼間しか死ねない障害児の親
福祉を勉強してなくてよかった
その状態で健康・・・ごほごほ
えみちゃん
事故で死んでしまうかも?
入院したら・・・生きていても死んでしまう
えみちゃんが生きているということ
思いがけないこと
訳のわからないこと
それが生きているということ
葬儀の後に高速道路で・・・
痰が詰まって亡くなった
悔しかった・・・と五十嵐さん
腹が立ったこと
「ああいうことがあるから
あずけとけばよかった」という・・・
「どうして私に預けてくれなかったのか」
という、女の子たち(支援者)
母の言葉・・・
こんな重度の子を預けられない・・・

愛され愛しながら生きた20年・・・
明らかに違うが、同じ20年を生きて
今、ここで出会ったことに・・・
この人らの傍を離れられない
革命よりも革命的・・・
価値観・・・
1981年に青葉園・・・
翌年の基本理念
青葉園・・・施設という概念はなかった
措置制度も知らなかった
傍に居りたい=失いたくない
ぼやぼやしてたら施設に連れて行かれる
それは危ない・・・で
生活拠点的「場」
運動体
集団=人の関わり
から立ち上がっていく運動体
理解・・・が出てくる
1982年やから言えた
生活拠点・・・ハードではない
人の居場所
私が居るということを示す場
誰しものが・・・である
そこに価値的に主体として位置づく社会を
転機 阪神淡路大震災
被災パラダイス
とにかく生きんがために生きる
その実感・・・
全てのサービスや専門性が
立ち入ることのできない
生きんがための役割をみんなが
その際、多くの入所の施設が
ベットを空けてくれ
さあ逃げてらっしゃい、と・・・
とんでもない・・・
持っていかれてたまるかえっと
やってるうちに誰が・・・かわからない
あいつとあいつという感じ
汚いもん順に風呂へ・・・
本人中心の支援に
自己価値を發揮していくこと、
失うわけにはいかないこと

だったら、もっと日常から預からないと

ばおばぶの決め事
障害の有無程度関係なし
年齢も、居住地も問わない
理由は問わない

酷い話をした方が預かってもらえたり

24時間365日、1秒と空かず

必要の無い時に預けた方は居ない
短く...

事業所は増えて...
システムの中で量が決まってるって?

計画?、
人間って...1ヶ月も立てない

落ち着いている裕子さん
とんでもなさを持っている

とんでもないことする人はかわいい

進路...決めるなんて馬鹿じゃ

施設から出された裕子さん
父母が倒れていて帰された
寮母さんが噛まれて
危険だと...

悔しかったこと...
GSで暮らす裕子さん

福祉の仕事をしている連中が
追い出した人を
GSのスタッフがみている

福祉の仕事をしてしまったがために
失ったことがたくさんある...

二十歳まで生きられませんか...
裕子さん、、、

ガタリ...
アルテルナティブ=別の場に立つ
その外に出ること
裕子さんは出してくれた

全てを社会福祉によって...×
裕子さんにとっていいと思っている
ことをしている...

だから、もうひとつ...
常に何かもうひとつ持とうよ、、

図...真ん中に「この街で暮らす私」

谷野ちえみさん
母...この子は青葉園でしか
生きて行かれへん...と

誰も「どうしよう」とか言わなかった
判断したわけでも
論議したこともない
どうしようもなかった...

どうしようもないことはよくある
論議しても仕方ない
合理的には整理できない

死んでしまわなくても、
その人の価値は死んでしまう

キム先生
食べることしか楽しみがないのか
入院させといて...
さっさと...
どんだけおもしろいことするかが...

彼女の意思を代弁するんやない
彼女の意思は在る
確信している
問うてきたし、選び取った生活

他の人に説明できるのか?
で、崩れていく中での
関係世界の中にある
それを明確にするための権利擁護
成年後見

制度改革の中で
パーソナルな支援の問題...
程度区分 協議調整
何故にかを主張してきたが
全て、からみとられた
...矮小化された議論

相談支援もサービスか?
違うやろ、、、。

利用契約 市民的開放だった筈が
二流市民からの解放
更に支援者も解放される筈だった
新自由主義的な論理に巻き込まれ
本質を見失った...
互いに存在の価値をおとしめられた
そのことをやりかえしていく
仕返的に...

本人中心支援...
対極は、人を類型化し
サービスや専門性をのつけ

福祉を作っちゃったから
福祉を作ったことが悪くない
そこで停まったことがダメ

レスパイト・・・
レスパイトじゃない

A+Bではなく、
そんなこと、関係ないだろっ!

生活支援を作る際に・・・
制度に乗せようとした

みんな自由になった筈なのに
本当の選択なのか・・・

A定食とB定食・・・
選べるように
契約できるように
それが選べること?

レシピが全て同じなんて・・・

選ぶということって・・・

こういうふう決めていく制度
社会システム等意識も含めて

管理のシステムから逃げ出しましょう

二度と管理されないようにしようよ

しかし・・・強化されていく

自由と管理
情報と管理

普通じゃないことをスルーしている

檻の中 鉄格子
見えるものは解りやすい
実は・・・
そこから出た人は・・・

出た際の鎖に気がつかない

みんな自由で暮らしている映画
時を告げる鐘・・・

その鎖を裕子さんにつけたくない
でも、繋がれている
人間としてできることは
自分が裕子さんと繋がれること

自由と情報・・・

究極のもうひとつ

結果的に人の存在を始末するということ

埋め殺しへの抵抗

それぞれの人の役割
かかわりのない、変わることでできない
役割・・・

図・・・
取り囲まれている・・・
横に向けたら、立ち上がっていく
一緒に立ち上がっていく感じ
向き合っているのではなく・・・

これだけでは済まず・・・
揺する 揺らぐ・・・ということ

怒っている
本人中心の専門家やと思ってるのか

一緒に揺らぐということ
本人かって解らんやろ
悩み揺れていくんやと

ほんまに悩んだんか?ということ

西尾としえさん
わがまま しゃあない

親やから、とかやない
親に愛された娘としての役割

世界が変わる

みんな60越して
そっちが主流
だんだん障害になっていく層
その世界に入った時に
青葉園の65歳超えた人が生き活きと
生きていと・・・
みんな同じに向かっていく
青葉園の方々は超先輩

そこが連帯
高齢者連帯・価値観変革
そこに突入する

そこが五十嵐さんとも共通する
だからパンツはかんとと

制度・・・
今までの制度・サービス・専門性を
否定するのではなく、
そこを積み上げて、人の存在を始末してい
装置になっているかもしれないが、
それでもそれを食い止めながら
合意の世界で作られた建物の上に

法をやめるとかではない
その仕事、その奴隷にならないこと

奴隷として働かされている

この仕事をやっている人が
人間性を取り戻すということ..

階段の絵を書いて補完性の原理の
話し

『社会福祉原論』(岡村重夫)の引用

僕らが制度内の仕事だけで福祉を
やった気になっていたら、
大切な人達の未来を厚労省の会議室に
委ねることになっちゃうんだぜ

「保護的に始末する装置から共に逃げ、
相互の主体化に向かう」。ツボです！

次の地平を作る、ひとりひとりの
存在を認め合う地平をつくる

天空の...

そのことの実体化...

どんな制度設計をしても、

市民連帯の元でしか生まれない
その実体化を考えていきたい

保護的に始末される装置から
逃げる、共に逃げる
逃げる

ひでちゃんは始末された

保護的にとはサービス＝始末する装置
んな白旗掲げて逃げる
おいかけてた奴は包囲される

清水さんと五十嵐さんの共通点と相違点

☆楽観的?

☆「逃げろ」「逃走」は「闘争」?

☆五十嵐さんは常にパンツをはいてない?

☆清水さんはパンツをはきつつ、しかし、五十嵐さんの前でパンツを脱いで?

☆パンツは鎖?

☆脱げないパンツは...

☆違ってそうでそうでもない「計画」...西宮での計画と、計画なんてという五十嵐さん

☆清水さんの言う「計画」とは、実はそれとは対極...

☆桑山さんの言う「経済合理性だけでは動かない生物」...

☆ブータンの国王がきたときの話し...桑山さん

☆一方での新自由主義の考え...動機付けがないと、を否定できるか

☆この人の作った物語に確信がある...暮らした時間がそれを言わせる...桑山さん

☆仕組みとはぶち壊されるもの...はあたりまえ

☆五十嵐さんは解り難い言葉というか話し振り

☆清水さんは解り難いよう言葉を作っているような

☆しかし、言葉の持つ力というか、その本質は難しく、...

☆だから清水さんの話しは解り難い^-^;

☆逃げ方を考える際に...??

2013.10.29.

「白」革命」と「もうひとつの福祉」 逃げようぜ、一緒に！

★ 僕らの大きな思い

措置時代には「障害があっても人間다운生活」を守り続けた。
支援費制度以降「」を取り戻したい。

シル・ド・シズ
「結局はもっとも冷徹な監禁にも
比肩する管理・ケアシステムに
関わってしまつたことを忘れてはならない」
(京子事件)

施設入所、病院での長期入院を「監獄」にたとえられた。現在の地域移行の生活支援施策は鎖につながること。

措置時代「人としての普通の暮らし（おれちゃんと同じような暮らしをしたい）」を求めていたか。
支援費以降「人として普通ではない、暮らし（入所・入院）を強いられていた。
第3の概念「障害者としての普通の暮らし（グループホームで暮らしたい。せせたい）」に。

カール・シュミット「主権者とは、例外状態に於いて決定をくだす者という」（政治神学）

ミシェル・フーコー「したがって、鎖はとかれ、狂人は自由の身となる。そしてその時、理性をとり戻す。いや、
そうではない。それじたいにおいて、それじたいとしてふたたび現われるのは理性ではなく、すっかり
組み立てられていた社会的なさまざまな種別である」（狂気の歴史）

「障害を持つ人が「障害者」という種別に置かれる。

制度は、その人の主権を奪う。

なぜ、そんな障害を持つ人の普通や、幸せ、よりよい暮らしを、制度に求めたのか？

僕は何をするのか。

ジル・ドゥルーズ「恐れたり、期待をもったりして
ければならないのである」(記号)

3つの武器

「障害者」たる

1. もうひとつの福祉

- ・制度に幸せを求めるとは、障
しなし。現代社会において、制度
たかろ。「もうひとつ」
「もうひとつ」は、様々な場面、し
・ばあばあの利用者さん
・裕子さんには、小島か
つかつてみたりする。

2. 知性を二かき

- ・体が弱くは命かりやすい。坂
しなし。知的な障害を持つ人につい
て求めても、それを実現させられ
それなのに、本人主体とか、本人
・裕子さん、了子さん
ように、知性をみか
張りめぐらされた屍
一緒に逃げ続けたり

3. 爆弾をしかける

- ・命かりやすい、キレイな言葉は、
しなし、誰一人、何一つ落とさな
・書くこと、発言すること

はたけず、闘争のための新しい武器を探しもとめな
と事件)

逃げよう! 大切な人と一緒に。

言を持つ人を、障害者にしてしまうこと。
のない福祉は考えられない。

ベルに現われる。常に新しい「もうひとつ」を求め続けると。
には、制度と同時にもうひとつ、「ばあばあ」がある。
五+流わいりつた人かい。と同時にもうひとつ「制度」も

道を車いすで登らせるとか、下をたければ、支持者失格。
て、その人か人としての普通(お兄ちゃんと同じような共し)
知性を持った支持者はほとんどいない。
の意志を尊重?

そして大切な一人(ひと)か人肉として幸せを求められ
き、高まる。
に気がつく知性、闘争の方法もみつけ出す知性。
木の知性。

マクノリテ、を落としていく。耳ざかりか、口、スーと入り出ていく。
ように話すことは、命かりにくい。心の中に何かを残す。
とを止めないこと。聴いた人、読んだ人の心に爆弾を。